

## 鹿田地区将来構想(建物等)の答申

平成 24 年 3 月

### 1. 本委員会の必要性

鹿田地区は、岡山大学病院、大学院医歯薬学総合研究科、大学院保健学研究所、医学部(医学科、保健学科)、歯学部および薬学部の一部が存在する。本地区で活動している人員は病院を含めて現在、職員総数約 1900 名、大学院生約 900 名、学部学生約 1700 名で、総計 4000 名を超える。施設的にも学部学生の教育施設、病院に代表される診療施設、大学院生を含む研究施設および管理部門がある。

この地区の建物整備に関する将来像を検討する委員会は過去全くなかったわけではないが、結果的に大学全体に認められた長期ビジョンは存在していない。そのため、建物等の建設、更新は施設部門からの提案と執行部とのやりとりによって整備がなされてきた。もとより施設整備に関しては、時々国内の経済状況、政治状況、あるいは阪神大震災やこの度の未曾有の震災などに各種影響を受ける側面があるのは事実であるが、長期的ロードマップなしに行ってきたために、やや短期的、近視眼的なものであったことは否定しがたいところである。病院機能として外来、中央診療部門、入院棟が連続することは当然であり、それなりのまとまりを示しているが、教育、研究、動物施設や RI 施設等々については長期構想に基づいているわけではない。学生教育施設における整備は、鹿田地区が立ち遅れており、カフェテリアなどの福利厚生施設も同様である。この遅れは施設の老朽化度合の差も一因であろうが、公式の長期構想計画がないことも理由のひとつとして指摘されている。

狭隘さが顕著なこの地区において、「森田ビジョン」に謳われている秩序ある施設整備、美しい学都となるために地区内ゾーニングの策定とそれに基づく長期ビジョンを提案し、本部、施設部門と共同作業によりこの地区公式の建物(等)の長期計画を策定することが是非必要である。

### 2. 長期計画の議論の対象となる年代

この地区の中にある建物は、それぞれ建築された時期が異なっている。北西部位にある旧生化学研究棟(講堂を含む)は昭和 7 年、その東隣りの旧栄養学研究棟は昭和 8 年に竣工しており、現在でも研究分野や学生 BOX として使用されている。これらはすでに歴史的に高い価値を有することが認められており、前者は耐震改修が進行中である。医学部の他の基礎研究部門の大半は平成 11 年から 20 年に建築された新営の建物に移動した。一方、現中央診療棟は昭和 50 年、医学部臨床研究棟は昭和 54 年、歯学部校舎および外来部門は昭和 55 年、外来診療棟は昭和 60 年、保健学科棟は昭和 62 年に建築されている。耐震面を含めて概ね築後 30 年程度で改修、その後 20 年、すなわち築後 50 年程度でその使命を終えることが原則である。平成 24 年度施設概算要求においては、医学部基礎講義実習棟、臨床研究棟の耐震を含む

大規模改修、系統解剖実習や法医学解剖を含む融合型教育研究棟の新営が認められた。また、新中央診療棟(1期)は平成24年中に完成予定で、その後新中央診療棟(2期)も認められる方向性と考えられる。薬学部は、一部新規の建物がごく最近建築されたが、大半は大規模改修が完了したところであり、後者については今後少なくとも20年程度使用する必要がある。

このような事情を勘案すると、鹿田地区建物(等)の長期構想は、歯学部、臨床研究棟、中央診療棟などが改修後20年あまり使用されると想定すると、30-40年後の像を描くことを一つの目安としたい。森田ビジョンに示されているように、岡山大学がその地の利を生かし、中国四国の医療中核キャンパスとして機能することを目指すうえで、本長期構想は非常に重要である。

### 3. 長期構想の議論の整理点と提案

(1) 狭隘となっていることは誰の目にも明らかであるが、それを著しく助長しているのは、自家用車の急増にある。現在、患者関係者用に約500台、職員等に約500台の駐車スペースがあるが、いずれも一日あたりその2倍以上の駐車実績となっている。この点については、現在種々議論を進めているところで、立体駐車場の建築や隣接の市有地、他の場所での駐車場確保などを模索しているところであるが、長期というよりはごく喫緊の課題として別に議論すべき問題である。しかし、いずれにしても狭隘なこの地区においては、建物自体を高層化することが必要な現況となっていることは論をまたない。

(2) 地区内のゾーニングについては、今後の課題であるが、この度学長特別補佐となられた妹島さん西澤さん(SANAA)により提案されたゾーニングは考慮に値するものである。すなわち、北の部分は本地区の外への顔という側面があり、外来などの前にはそれにふさわしい構造、駐車場、西の部分の旧生化学、栄養学の建物とそれに近接した新ホールは、憩と顔の施設として整理することが可能である。

本体となる中央部分については、東側には病院の外来、中央診療部門、管理部門、入院棟が大きな存在となる。医科と歯科とでは外来、入院の占める割合が大きく異なることが考えられ、研究室、講義室、外来棟、中央診療棟や入院棟との位置関係について緊密な連絡と議論が必要である。なお、現在の中央診療棟は相当の広さ(約18000 m<sup>2</sup>)があり、一部は病院機能の補完とするとともに総合研究科としても有効利用することが考慮されている。

その西側に建設予定の融合型教育研究棟は解剖関係、学部横断的教育機能を持ち、旧生化学研究棟の3分野など文字通り教育研究機能を担うこととなる。今後は、同地区周囲に医学部(保健学科を含む)、歯学部、薬学部の各学系を関連づけて建設することも考えられる。各学系にはそれぞれの独自性、役割の差異、文化的背景の違いがあるのは当然のことである。したがって、それぞれの学系を構成している分野については現況を尊重し、学部学系としての自主性は堅持すべきと考える。しかし、医歯薬学総合研究科を設立するにあたっては、それによる相乗的効果を重視したはず

であり、この理念あるいは理想を具現化するという観点からは、相互交流がなされやすい環境となることはこれに適合している。薬学部については、前述したとおり、将来 20 年後までに合流することは原則考えられないが、病院実習、薬局実習に関係する教員・学生へのスペース確保は必要である。また、臨床部門のみが鹿田地区にあることは総合研究科の一翼を担うには不十分な態勢であり、研究分野のうち必要な分野について将来的な合流を検討すべきである。保健学科については、現在別の大学院組織となっているが、一方、医系教員の存在、看護師、臨床検査技師、放射線技師は医療チームの一員として医師、歯科医師、薬剤師とチームを組むことが必要であり、教育する教員がより協力しやすい位置にあることは利点が多いと思われる。座学の講義部分については、現在医学部基礎、臨床、歯学部、保健学科の講義室が点在しているが、これをどのようにするかは将来的な検討課題となりうる。動物施設、RI 施設は現有施設を拡充するのが有力な考え方である。医歯薬が総合することによりそれに近い場所にこれらの研究施設があることは有効利用をより推進することとなる。

最も南側のゾーンについては、グラウンド、体育館、武道場、テニスコート、弓道場、学生課外活動用の BOX 施設等があり、これらについては、極力維持したいと考える。全人格的医療人の養成がわれわれの責務である。グラウンドについては地区の狭隘さとの関係で議論が残っているところもあるが、鹿田地区が岡山市の中心的場所に存在するところから、震災や津波発生等の大型災害が起こった場合の市民の避難地区としての役割も担うことが考えられる。なお、駐車場問題もあり、グラウンドを二層化することも検討すべき課題である。現在保健学科棟がある場所については、例えば、職員、医員、大学院生、研修医などの福利厚生施設、外来研究者のゲストハウスなどの建築が望まれる。

このようにして、鹿田地区は北部分の「外部への顔、市民との交流、憩のゾーン」中央部分の「医療施設、研究・教育ゾーン」、南部分の「福利厚生ゾーン」に分けることができる。

#### 4. まとめ

激動の現代社会において 30-40 年後のキャンパス像を描くことは容易ではない。しかし、基本的将来計画なしには積極的予算要求とそれによる開発を進めることはできない。このような観点から本答申案を現時点での鹿田地区の到達目標としたい。なお、社会情勢は今後とも変化することが予想される。それらによる見直し作業が生じる可能性があることは自明の理である。しかし、その際も本答申案を意識し、その精神に則ることは必要である。

# H50

